のない人は何處となく粗雑で、且つ其の老後は哀れなものであります。現に私の知つて居る一人の老人は、全然趣味の無い人で、餘り仕事がないと云ふので草を毟れば、折角丹精して植ゑてある牽牛花までも毟つてしまひますが、牽牛花と雑草の區別が立たないので、斯かる無趣味の老人は實に可愛さうなものであります。然し此の趣味は若い時ならば養ふことが出來るものでありまして、私の知れる或奥様は、本來趣味の無い人でありましたが、努めて庭の手入などをして居る中、段々趣味を感じ、今では全く主人の手を煩はさず、庭の事は獨りでやつて居られますが、之を子供の時から養へば、一は其の遊戯となり、一は品格を高くし、且つ最後に老後の樂みを殘すことが出來ます。此の度の日清事件で私の懇意な方が監獄に入つて居られますが、私は夫れを思ふ毎に、牢屋と云ふ所は何んな所か知らん、青い空が見えるか知らん、綠の草木の一枝でも眺められるか知らん、先生は嘸お苦しいだらうと思ふのでありますが、牢屋にして只窓より光線がはいるばかりで、青い空を見ることが出來ず、草葉の一枝をも見られない所ならば私は死んでしまふのであらう。然し乍ら若し牢屋にして掌大でも青い空が見え、名もない草の二三本でも眼の前にあるならば、私は失望せずして樂むことが出來ると思ふのであります。要するに子供は何處までも活動すべきもので、遊戯を選むにも其の活動を自由ならしむべく、而して同時に努めて自然に接近せしめて、其の美を感得せしめ、之に因りて趣味を養成せしむることは、子供を育つる上に極めて必要なことであります。

手技としての排べ方に就て

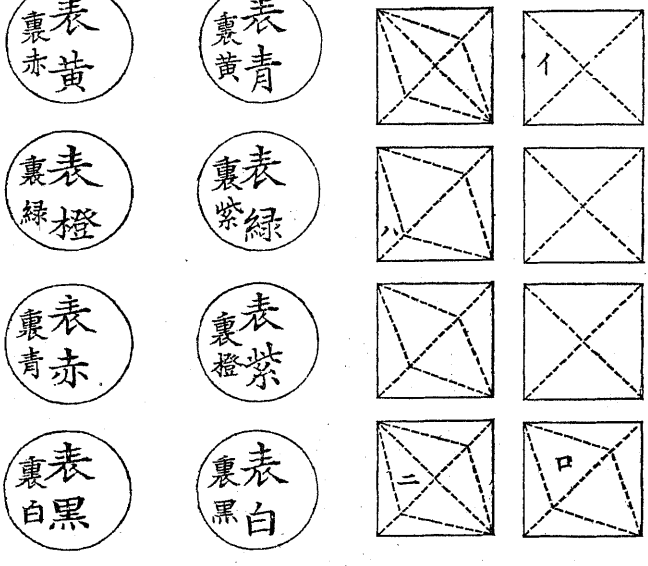
和田實

左の一篇は拙著「遊戯的手工の理論及實際」中の一節で吾人の新恩物教授論である。大方の御批評を得たいものと思ふて茲に之を掲出した次第である。

茲に排べ方と云ふのは、從來の恩物中で、色板、

箸輪、貝殼、紐と各別々に呼んで居つたもの、總稱である。是等の手遊びと云ふものは各玩具毎に別々に玩ぶよりは色板と箸輪とを交せて用ゐたり紐と貝殼とを交せ用ゐたりする方が遙に興味もあり工夫の範圍も廣く且つは各種の物體の特長をも彼と是と同時に比較して居る中に會得することが出來るので、却つて都合がよいと思ふので著者は之を一種類として包括する樣にしたいのである。

一、色板　色板には種々なる系統の材料がある。我國に行はれて居る主なるもの、中にも、中垣式、岡山式、藤式等がある。何れも色と形と其數とに於て各別種の組合せを以て居る。此外地方々々に因りて當局者の都合上色々異なつた組合せをして居るものもある。殊に幼稚園に於てはフレーベル式と稱する六種の形を用ゆるのが普通である。曩に本會の出版した圖形中の色板も亦フレーベル式に因つて出來たものである。今參考の爲めに一應右の各種の色板を說明して見ると、中垣式と云ふのは東京府師範學校中垣兵次郎氏の考案したるもので直徑一寸五分の圓板と方一寸五分の正方板各八箇を種々に左圖の如く切つたもので、全體の數は八十四箇の多數である。尤も是は使用の際必ずしも悉皆を用ゆるのではなくて少きは二三箇、多きは數十箇を適宜用ゆるものである。



岡山式と云ふのは東京高等師範學校教授岡山秀吉氏の考案で左圖の如き形體より成つて居る。そして是は中垣式の木製であると違つてボール紙に色紙を貼つて種々の形に切つたものである。

一

正方形　一枚
　表　赤色
　裏　白色

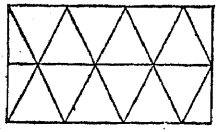
長方形　二枚
　表　黄色
　裏　白色
　表　青色
　裏　白色　一枚

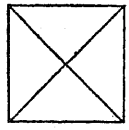
二

線狀形
　表　青色　長　二本
　裏　白色　短　二本

圓形　四箇
　表　赤色
　裏　白色　大二箇
　表　黄色
　裏　白色　小二箇

二等邊三角形　四枚
　表　赤色
　裏　白色　二枚
　表　黄色
　裏　白色　二枚





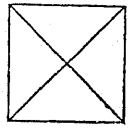
三

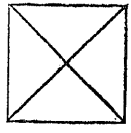
二等邊三角形　八枚
　表　青色
　裏　白色　二枚
　表　紫色
　裏　白色　二枚
　表　櫻色
　裏　白色　二枚
　線　綠色
　表　白色　二枚

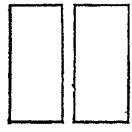
四

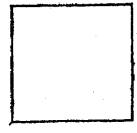
正三角形　十二枚
　表　桃色
　裏　草色　四枚
　表　卵色
　裏　藤色　四枚
　表　水色
　裏　薄櫻色　四枚

不等邊三角形
　表　黑色
　裏　黑色

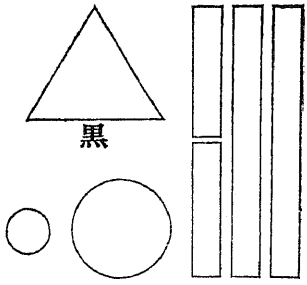


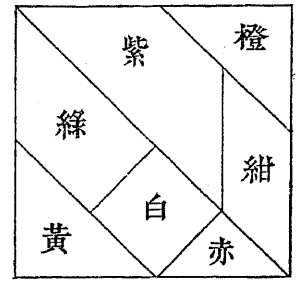




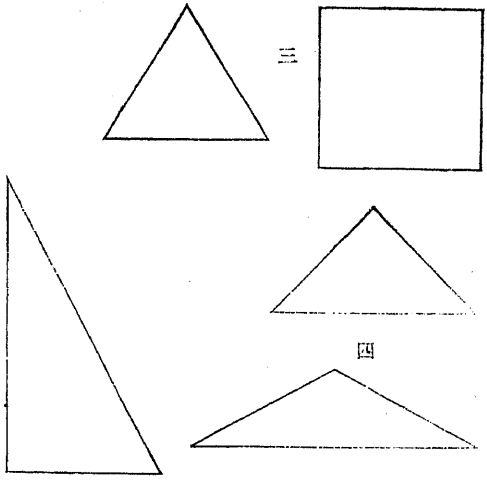


又藤式と云ふのは東京女子高等師範學校附屬小學校訓導藤五代策氏の考案に因つたもので左圖の如き形體で岡山式と等しく、ボール紙製である。そして此藤式の色板は前の二種のと違つて表も裏も同色である。





フレーベル式と云ふのは從來處々の幼稚園で用ゐて居つたもので左の五種の形體より成つて居るものである。



以上四種の色板は我國手工界に行はるゝ主なるものであるが、偖て何れが一番宜しいかと云はれると一寸返答に困る。吾人の見る所を以てすると中垣式のは形の種類が少くて徒に其數が多いので餘り賛成出來ないものではあるが、其他のものに就いては何れがと云つて特に宜しとする程のものがない。併し強ひて吾人の意見を定めて見ると藤式のは尤も理想に近いと思ふ。何故と云ふに全體に數が少くて形體の種類は最も多い。而も普通人の知る可きものを網羅して居る。且一箇を分割配合するところはフレーベルの理想に叶つたものであるからである。此正方形を七個の形體に分割することは支那に於て古來行はれ來つた謂所七功と稱する分截法で之を以て諸種の形體を象り作くることは餘程以前より行はれ來つたものである。若しフレーベルが之を知つて居つたならば必ず之を其恩物中に採用したに違ひないと思ふ。然ればとて吾人は幼兒敎育に使用す可き色板を此藤式に限ることには賛成することは出來ぬ。元來色板と云ふものは使用する其都度に於て形と、色と、數とが

常に固定して居なければならぬと云ふ譯はない。然るに以上四種の色板は其使用の數に於てこそ一定の定限もなけれ、其形と色とは常に結合して然も固定して居る。唯中垣式のは同種の形の數が多い爲めに色も種々あつて使用の際色を取捨する自由があるけれども其他のものに至つては何れも某種の形は表が赤、裏が綠と定まつたとすると何時までたつても其儘で會々色の異つた同形を求め樣とすることがあると最早其要求には應じがたきものとなつてしまふ。是れ果して適當なことであらうか、若し四角は赤、三角は白と終始一定して置いて差支ないとすれば議論はないが、四角にも色は種々ある可きである。三角にも色々の色があると云ふことに依つて、形と色とが別種のものとして幼兒の抽象的意識を進めるものとしたならば是は誠に不都合なことで、所謂、杜に膠する類ではあるまいか、吾人は思ふ。色板に於ける數と形と色とは決して終始一定す可きものではない。三者が常に移動し配合する所に此色板の妙味は存す可きものであると。因つて吾人は常に或一定の色板を用ゆることには絶對に反對せんとするものである。即ち或時はフレーベル式を用ゆることもあらう、或は藤式を用ゆることもあらう、時に依り材料に應じて適宜其都度に定めるが至當と思ふ。それから色板の製造は前にも說明したる通り中垣フレーベルの兩式は共に薄板に塗料を施したるものを用ゆれど、岡山式と藤式とは共にボール製を用ゆ。吾人は寧ろ後者に贊するものである。元來、使用の都度に於て多少とも變化を要する色板を保姆自から製することを爲ずして徒に高價なるものを用ゐて永く變化なからしむることは此玩具の本旨に反するものと云はねばならぬ。勿論吾人とても使用の都度既に使ひ濟みたる色板は容赦なく廢棄せんとするものにはあらねど、多少異りたる形を加へ其數を加減し其色を變化せんとするには幾分の使用殘りを出すことは免れがたきことなる可し、斯く臨機斟酌をなし得んには勢ひ其製造簡易にして且經濟的ならざる可からず。此點に於てボール製は最も適當なるものである。ボール紙を以て色板を造らんには一枚七十匁內

外のボール紙に適當な色紙を貼つて要する所の形に切るのである。其切り方はボール切押切と云ふ手工用具を用ゆるのが一番輕便である。

二、箸　箸は木製又は金屬製で徑一分位な四角な棒である。若し色板の中に藤式や岡山式の樣に棒狀のものを交せるとすれば是は必要のないものであるが、時に故意と此樣な物體を合せ用ゆることが却つて中々に興味を牽くことがある。從來幼稚園などではフレーベル式色板に棒狀のものがないために之を用ゐたのである（勿論フレーベルの恩物論に表はれた理由は然うではないが）。そして其長さは一寸二寸三寸四寸五寸の五種に稀に五分のものを加ふるのである。吾人は幼稚園として又幼兒教育としては一定の物質に限ることなく、時にはボール製、時には木製と竹製など、時々種々なる物質のものを交換して遣はす可きものと思ふのである。且ボール製及木製は自由な色を選ぶことが出來るが、金屬製はそうは行かぬ。

三、環　環は金屬製である。是も色板の部に於て打拔きで拔いたらば容易く出來るものであるから必ずしも金屬製に限らない。是も矢張り時に依つて變化する方が面白からうと思ふ。從來用ゐられて居る大さは大中小の三種で大が直徑一寸五分位小なるが六分位のもので、何れも全環と半環とがある、それから稀には大環又は中環の四分の一の弧線を加へ用ゆることがある。

四、貝殼　貝殼としてはキシヤゴ、ニシ、其他海岸に見ゆる小さき貝殼は最も適當なものである。小石を以て此が代用としても宜しい、又ドングリ、南天の實などの類を以てしてもよい。兎に角、粒體を以て宜しとするのである。

五、紐　徑一分位で長二尺ばかりの打紐が最も宜しい樣である。時には唯の木綿糸を水に濡らして用ゆると面白いことがある。或は風を變へて細い鎖を使用することは時に採つて興味があるに相違ないと思ふ。

以上五種の排べ方材料は圖形に示してある通り各獨立して種々なる物體を象り作ることが出來るには違ひないが幼兒が少し進歩して來たらば漸次彼是と混用することは頗る興味がある樣である。尤

も之を混用せしめんとするにしても室内に入り机に向ふ時直に材料を混與するよりは先づ始めに一種の材料を與へ之を用ゐ了りたる時に又別種の材料を追與することが小さい子供には必要の樣である。例へば始めに與へたる色板で舟が作られた時に適宜な半環が追與せらるれば是が直に波として用ゐられ、更に長くし、やどかりなどの具が與へらるれば是が波間の魚か或は船上の人となる樣なものである。

排べ方指導の方法として注意しなければならぬことは既に前篇に於て述べたる如く先づ排べて見せることである。屢々排べて見せた結果は幼兒の自發的興味は刺戟されるに相違ない。既に自發的興味に乘じて自ら想像界に遊ばんとする樣になつたらば、保育者は專ら適當な配合に於て諸種の材料を給與することに腐心して妄りに干渉してはならぬ。何となれば此時が眞に自由なる遊戯、熱心なる作業、神聖なる自發活動の實現であるからである。然るに通常處々の幼稚園に於て色板ならべなど課するのを見るに徹頭徹尾保姆の模範の極端なる模倣である。斯くして自發活動を發揮せしめたとしたならば地下のフレーベルは浮ぶことが出來まい。

且夫れ此時代の幼兒の是等の玩具に對するや、其遊戯は自ら實驗的研究的態度を以て遊ぶもので、決して後に發達する精神的思考的構成的工夫的態度を積極的に現はすものではない。彼幼兒が色板を以て排ぶるや初めは多くは、何を排べんと云ふ目的もなく、工夫もなく排べて居るもので何物をか排べて、而して自ら「是何でせうね」と保姆に聞き「時計の樣ですね」と云はれて初めて時計時計と呼んで喜ぶ樣なことの多いのは、以て其遊戯が初めより決して思考的工夫的でないと云ふことの證據と云はねばならぬ。斯う云ふことは積木などの場合には殊に多く表るゝことがあり、畫き方などにても常に表るゝことである、吾人は世の保姆達に切に此點に於て反省を望まざるを得ない。殊に六七歳の長幼兒に至つては尚更自家の工夫的自由行動を奬勵しなければならぬ。其終りに及んでは材料の選擇迄も時には彼等幼兒自身にさせる

こどが最も適當である。箸を何本、色板をいつと自ら持出し來りて一人で遊ばすことも必要である。此時分の幼兒の遊び方は保姆の手數を煩はすことなく一人で機嫌よく遊ぶ樣にある可である。幼兒の成績に誤りのあつた場合之を有効に教育的に直して遣らうとするには先づ其幼兒の觀念界を調べて遣らねばならぬ。而して幼兒は訂正された正しき觀念に依つて自ら訂正しなければならぬ。普通の場合には「是は是でよいのですか」と反省を求むれば、多くは直に正しく訂正されるものであるが若し觀念に不明の所があるか誤りがある場合には、唯注意した位では直らぬことがある。此場合には畫又は實物に依て不備なる觀念を補ひ而して後訂正させねばならぬ。尤も多數の幼兒を扱ふ際などには動もすれば手廻り兼て此の如き手數を省くことがあるのは止むを得ぬことであるが、然る時は機を見て訂正して遣る必要がある。概して排べ方と云ふものは机上に唯置くのであるから折角出來上つた成績物も一寸手先や着物などの觸れた爲めに形體を崩してしまふことが幾らもある。斯る遺憾なからしめんために近頃色板に磁石を利用したものがある。是は排べた成績物を持ち歩くことも出來るので至極よいものである。殊に保姆が黑板上に排べて多勢の幼兒に一時に見せ樣とする時などには此の教師用を用ゆることが頗る便利である。東京九段中坂上のフレーベル館玩具店に注文すれば藤式でも岡山式でも但しはフレーベル式でも自由なものが得られる。且其形體は使用者自から自由に貼り代へることも出來樣から幼稚園には便利なものであらう。(定價は同館に紹介すれば直に知れるであらう)。

それから排べ方をする爲めに從來は幼兒用机の上に一寸四方位な大さの方眼が畫いてあつたものである。是は今も必要を唱へて居る人もあるが吾人は然のみ必要とも思はない。寧ろ多少幼兒を刺戟してこせつかせる傾のあるのを嫌ふ方である。殊に之を八釜しく利用して排べたものゝ居すまひなどを訂正する標準として居る人もあるが吾人は斯る人を見る度に今少しく鷹揚にして欲しいと思ふのである。